

論文

この人を分陀利華と名づく

中島 航

はじめに

『教行信証』「行卷」の「正信偈」に、

一切善惡凡夫人
聞^{スレハ}ニ信^ノ 如来弘誓願^ヲ
一
仏言^{ヘリ}ニ廣大勝解者^ト
一
是人名^{ヲケ}ニ分陀利華^ト
一

一切善惡の凡夫人、
如来の弘誓願を聞信すれば、
仏、廣大勝解の者と言えり。
この人を分陀利華と名づく。

（『真宗聖典』二〇五頁）

とある。

この「正信偈」四句について、第四十五回九州大谷短期大学仏教学科市民大学講座（二〇二〇年度）において講ずる機会を与えられた。本稿はその講義をもとにタイトル及び内容を改め原稿化したものである。はじめに、この四句について、蓮如の『正信偈大意』によると、

「一切善惡凡夫人 聞信如來弘誓願 仏言廣大勝解者 是人名分陀利華」というは、一切の善人も惡人も如來の本願を聞信すれば、釈尊はこのひとを「廣大勝解のひと」（如來會）なりといい、また「分陀利華」（觀經）にたとえ、あるいは「上上人」なりといい、「希有人」なりとほめたまえり。（『真宗聖典』七五二頁）

とある。「如來の本願を聞信する一切の善人、惡人も如來の本願を聞信すれば、釈尊がこのひとを「廣大勝解のひと」とであるといい、また「分陀利華」にもたとえ、また「上上人」「希有人」とこの人をお褒めになるというのがこの四句の内容である。

本論では、ここで「廣大勝解のひと」という内容をはじめとして、釈尊に褒められるという「この人」についてそのところを尋ねてみたい。そしてそれは私たちにとつて具体的にどのようなことを教示するものかを考察してみたいと思う。

一、分陀利華について

まず先に分陀利華ということについて「分陀利華」とは梵語のブンダリーカの音写であり、白蓮華のことである。蓮の華の中でもっとも高貴なものとされる。

蓮の華と言え、『維摩経』の经文が思い出される。親鸞は『入出二門偈』にも引用されている。

高原の陸地には、蓮華を生ぜず。卑湿の淤泥に、いまし蓮華を生ず。

（『真宗聖典』二二八頁）

蓮の華は澄み切った高原の陸地には咲かない。卑湿の汚れた泥の中にこそ咲くのが蓮の華である。これは、私たち凡夫の煩惱からこそ、仏のさとり華が生じ開くことに喩えられる。

先の「正信偈」の一句では、「この人を分陀利華と名づける」と示されている。さて「分陀利華」という言葉は『仏説観無量寿経』に、

もし念仏する者は、当に知るべし、この人はこれ人中の分陀利華なり。

（『真宗聖典』一二二頁）

とある。ここでは「念仏する者」が「この人」であり、「人中の分陀利華」であると示されている。

この『仏説観無量寿経』の箇所について善導が『観経四帖疏』（散善義）で釈している部分を、親鸞も『教行信証』『信卷』に次のように引用している。

「分陀利」と言うは、「人中の好華」と名づく、また「希有華」と名づく、また「人中の上上華」と名づく、また「人中の妙好華」と名づく。この華あい伝えて「蔡華」と名づくる、これなり。もし念仏の者は、すなわちこれ人中の好人なり。人中の妙好人なり、人中の上上人なり、人中の希有人なり、人中の最勝人なり。

（『真宗聖典』二四八頁）

と、ここで善導は「分陀利華」を、「人中の好人」「希有人」「人中の妙好人」「人中の上上人」「人中の最勝人」と五つの讃嘆の言葉で翻訳し、これは「五つの嘉誉」^②とも言われるところである。これについて親鸞は『一念多念文意』において次のように言っている。

また『経』（観経）にのたまわく、「若念仏者 当知此人 是人中 分陀利華」とのたまえり。「若念仏者」ともうすは、もし念仏せんひとと、もうすなり。「当知此人 是人中 分陀利華」というは、まさにこのひとはこれ、人中の分陀利華なりとするべしとなり。これは如来のみことに、分陀利華を、念仏のひとにたとえたまえるなり。このはなは、「人中の上上華なり、好華なり、妙好華なり、希有華なり、最勝華なり」（散善義意）と、ほめたまえり。光明寺の和尚の御釈（散善義）には、「念仏の人をば、上上人・好人・妙好人・希有人・最勝人」と、ほめたまえり。

（『真宗聖典』五三七頁）

と、「如来のみことに、分陀利華を、念仏のひとにたとえたまえるなり。」と、釈迦如来によって、この「念

仏のひと」が分陀利華という最上の白蓮華に喩えられ讃嘆されていることが示されている。

二、念仏のひと

釈迦如来によって分陀利華と名付けられる「この人」、すなわち「念仏のひと」は、「正信偈」のこの四句でいうと「如来の弘誓願を聞信」する人であろう。

ここで「聞信」の「聞」は、『教行信証』『信巻』に『仏説無量寿経』の本願成就文を解説して、

「聞」と言うは、衆生、仏願の生起・本末を聞きて疑心あることなし。これを「聞」と曰うなり。

（『真宗聖典』二四〇頁）

とあり、「聞」ということは、如来の本願の起こされた本のところと、その結果を聞いて、疑いがないということである。また親鸞は『一念多念文意』でも先と同様に「本願成就文」を解説する中で、「聞」ということについて

きくというは、本願をききてうたがうところなきを「聞」というなり。また、きくというは信心をあらわす御のりなり。

（『真宗聖典』五三四頁）

と、「聞く」ということは、本願を聞いて疑う心がないのを「聞」といい、その「聞く」ということは信

心を表す言葉であると言っている。さらに『唯信鈔文意』には、

信心をえたるひとをば、「分陀利華」（観経）とのたまえり。

（『真宗聖典』五五六頁）

と、「信心をえたるひと」を「分陀利華」と述べているのである。つまり『仏説観無量寿経』の「念仏する者は「念仏のひと」であり、それは「本願を聞信するひと」であり、「信心を獲たるひと」ということである。ここで「獲信」と「ひと」ということについては、本学の青木玲が『獲信の人』（『九州大谷研究紀要第四六号』所収）で「正信偈」のこの直前にある「獲信見敬慶大喜 即横超截五惡趣」について述べる中で、「獲信見敬大慶喜」と『真宗聖典』（東本願寺）で示されている一句について、親鸞真筆の『教行信証』である「坂東本」では、親鸞が何度も文言を書き改められた上で、最終的に「獲信見敬大慶人」と記していることに注目し考察している。その中で青木玲は

親鸞は「獲信見敬大慶人」の一句について、特に「獲信」と「人」に注意をしている。この「獲信」と「人」について、廣瀬杲は「獲信」の具体性は「獲人」であると述べている。「獲信」によって「人」になる。では、どのような人になるのだろうか。それは「貪愛瞋憎のくもきり」に覆われている事実を自覚する人になるということであろう。そして、この人は「生死の大海をやすくよこさまにこえて、無上大涅槃のさとりをひらく」人である。この「人」について、「獲信見敬大慶人 即横超截五惡趣」の後には、

一切善惡の凡夫人、如來の弘誓願を聞信すれば、

仏、廣大勝解の者^{ひと}と言えり。この人を分陀利華と名づく。

（『教行信証』『行卷』『真宗聖典』二〇五頁）

と述べられている。この中に、「一切善惡の凡夫人」、「この人を分陀利華と名づく」と繰り返し「人」が出てくる。また、「廣大勝解の者」の「者」について、親鸞は「ひと」と読んでいる。この四句を通して、「獲信」の「人」の内容がさらに確かめられている。（『九州大谷研究紀要第四六号』一〇頁）

と、「一切善惡凡夫人」以降の四句も引き続き「獲信」としての「人」の内容が確かめられると述べている。また安田理深も『正信偈講義』第一巻で

「仏言廣大勝解者」は『如来会』の「廣大勝解者」、「是人名分陀利華」は『觀經』の「是人中分陀利華」から来ている。これらを真の仏弟子を明らかにする証文として用いられる。「仏言廣大勝解者」や「是人名分陀利華」は、者や人というところに意義がある。

信を獲るということは、人間が成就されるということである。親鸞聖人は、信を獲るということを、主観的な体験や思想を得たことではなく、人間を成就することとして明らかにされる。仏法に遇うということとは、人間を成就することである。それも漠然とした人間ではなく、具体的には真の仏弟子という人間が成就される。個人という人間が成就されるのではなく、仏弟子に位づけられた人間が成就される。

（安田理深『正信偈講義』第一巻、二二五頁）

と「人」について着目し、続けて「信を獲る」ということは「仏弟子としての人間の成就」と述べている。

三、凡数の摂にあらざる

さてここで親鸞の『入出二門偈』の中にも「分陀利華」について記している。

煩惱を具足せる凡夫人、仏願力によつて摂取を獲。

この人はすなわち凡数の摂にあらざる、これ人中の分陀利華なり。この信は最勝希有人なり、この信は妙好上上人なり。安樂土に到れば必ず自然に、すなわち法性の常樂を証すとのたまえり。

（『真宗聖典』四六六頁）

と、ここで親鸞は、煩惱を具足せる凡夫人が仏願力によつて摂取されると、「この人は凡数の摂にあらざる」と言っている。つまり「この人」として示される「人中の分陀利華」の人は、凡夫の数に加えられないと言う。しかし、善導は「凡数の摂」ということについて、『仏説観無量寿經』の「五苦所逼」^③の解説部分において

（序分義）また云わく、この五濁・五苦等は、六道に通じて受けて、未だ無き者はあらず、常にこれに逼悩す。もしこの苦を受けざる者は、すなわち凡数の摂にあらざるなり、と。

（『真宗聖典』二二四頁）

と、ここでは、衆生が六道の流転のいずれにあつても、五濁と五苦は受けるものであり、受けないものは

未だかつていない、ということである。つまり衆生は絶え間なくこれらに逼められ悩まされる。もし、この苦を受けない者がいるならば、それは凡夫ではない、ということである。しかし親鸞は、この煩惱具足の凡夫である「この人」が仏願力の摂取を獲ることによって「凡数の摂にあらず」というのである。これはどういふことか。

この部分について曾我量深は「教行信証」信巻「聴記」『曾我量深選集』第八巻に次のように述べている。

これは『入出二門偈』の善導章の一番終りのところに、「煩惱を具足せる凡夫へ、仏の願力に由つて摂取を獲る、斯の人は即ち凡数の摂に非ず。是れ人中の分陀利華なり。斯の信は最勝希有人なり、斯の信は妙好上人なり。安樂土に到れば必ず自然に、即ち法性の常樂を証せしむとのたまえり」とあります。煩惱を具足しているところの我らが、仏の願力に由つて摂取不捨の如来の光明の中に摂取せられるのであります。如来の光明の中に摂取せられれば、私共は五濁惡世の環境の中にあるけれども、如来の心境というものを仏さまが開いてくださる。だから私共は五濁惡世という環境に野晒しになつておらぬのであります。この『入出二門偈』の凡数の摂にあらずという言葉のとはここにあるのであります。

（曾我量深『曾我量深選集』第八巻一五五頁）

と、つまりは煩惱具足のわれらが、仏の願力によつて、如来に摂取不捨されるのであるから「信心のひとつは、凡夫の数に加えられないということである。そしてそれは、わたしたちが生きている五濁という惡世の中にあつても、如来の光明の中に摂取されているので、野晒しにされないということを述べられている。それは私たちに如来の心境というものを仏さまが開いてくれるからであると表現している。さらに続けて、

『序分義』の文は、凡夫だから五濁・五苦を受けているのだと、善導大師はこういうように解した。けれども、たまたま終りの言葉を切って見ると、若しこの苦を受けざるものがあつたならば、その人は即ち凡数の摂にあらず。これは除外例である。皆は五濁の苦を受けている。ところが、阿弥陀仏の本願を信ずる人は例外であると、こういうふうに関聖人は見られた。善導大師は例外などおっしゃったのではない、若しこの苦を受けざるものがあるならば凡数の摂にあらずということになる。だからして五濁惡世において凡数の根にあらざるものがあるということとは、道理に適わぬことである。これが善導大師の言葉の心である。善導大師の意識ではそうであるけれども、文章というものは意識と無意識とある。それは善導大師の浅い表面の意識では例外はないということである。しかし深層の意識というものでは例外を認めておられたにちがいない。(曾我量深『曾我量深選集』第八卷、一五六頁)

と、善導のころを酌み取って親鸞は五濁惡世においても凡夫の数に加えられない者がいることを明らかにされたと述べられている。

また、廣瀬杲は『観経四帖疏講義』において、この『入出二門偈』の「凡数の摂にあらず」の内容を次のように述べている。

煩惱を具足する凡夫人が、仏の願力によって攝取される、その時その人は凡数の摂に非ざるのであると、こう言うのです。だから煩惱を具足する凡夫が、仏の願力によって攝取を獲る時、その攝取の光明中に生きる存在はもはや凡数の摂ではない、と。

(廣瀬杲『観経四帖疏講義』散善義Ⅲ、八三一頁)

述べて、そうして、「この人」を「是れ」と押えて、親鸞は『入出二門偈』で「是れ人中の分陀利華なり」と言っているのだと解説している。

私たちにとって、五濁の中にあつて野晒しにされないとはどういうことであろうか。そして五苦を受けないということは私たちの現在ただいまの人生においていかなることを意味するのか。五濁とは、劫濁、見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁である。そして五苦とは生苦、老苦、病苦、死苦、そして愛別離苦であると善導は示されている。

「この人を分陀利華と名づく」という「この人」は、「凡数の摂にあらず」という人である。

これについて廣瀬杲は次のようにも述べている。覚者の境地以外の境に生きる凡夫という存在が、すべて五濁・五苦・八苦等に逼悩されるのだと、善導がそのように押さえていく理由として、

単にそういう事実の説明ではなくて、実は五濁・五苦・八苦等に逼悩することを忘れるという人間がいるからです。苦しんでいないつもりで生きている人間が出てくるからです。

（廣瀬杲『観経四帖疏講義』散善義Ⅲ、八三一頁）

という凡夫としての自覚、人間の無明性の問題を指摘している。つまり分陀利華と名づく「この人」とは、摂取の光明中において五濁・五苦・八苦等に逼悩することを自覚する人であろう。「仏、廣大勝解の者と言えり。」とも釈尊が讃嘆する。これは、広大な勝れた智慧がある人という意味である。つまりは、「信心のひと」は信心の智慧において煩惱具足の凡夫と自覚せしめられた人でもある。その人こそが分陀利華と

名づく人であろう。

『廣大勝解者』について宮城顗は『正信念仏偈講義』に次のように述べている。

「廣大勝解者」という『如来会』のことばですが、「信卷」の真仏弟子を明らかにされるところに、まず第三十三願触光柔軟の願を挙げられます。

設い我仏を得たらんに、十方無量・不可思議の諸仏世界の衆生の類、我が光明を蒙りてその身に触るる者、身心柔軟にして人天に超過せん。もし爾らずば、正覺を取らじ、と。

そしてその次に第三十四願聞名得忍の願、

設い我仏を得たらんに、十方無量・不可思議の諸仏世界の衆生の類、我が名字を聞きて、菩薩の無生法忍・もろもろの深総持を得ずは、正覺を取らじ、と。

この無生法忍、それから深総持ということが勝解ということの内容です。「忍」というのは、認可決定、事実をありのままにはつきりと認めるという意味です。その意味で「忍とは勝解之義なり」と定義されておりました、つまり仏法の智慧を「忍」ということばで表すわけです。仏教において智慧というのは、いろいろなことを知っていることではない。事実を事実として受け止めていく勇氣です。それがどんなにづらいことであろうと、どんなに厳しいことであろうと、それが事実であるならば、事実としてうなずいていくという勇氣を表すのが忍ということばです。もう一ついえば、その事実に生きるということです。ただ頭で理解するということではない。講録なんかを見ますと、忍というのは認めるという意味だと書いてありますけれども、私はどうもそうは思えないわけでありまして、やはり忍ぶという字が使われる意味があるはずです。それは事実を事実として耐え忍ぶ。

と、無生法忍の「忍」を解釈する中で、仏法の智慧、すなわち信心の智慧について、「事実を事実として受け止めていく勇氣」であると述べている。

つまり信心の智慧によって五濁・五苦・八苦等に逼悩する凡夫であるとの自覚は、その事実の自覚にとどまらず、その事実を事実としてうなずいて認め、それに耐え忍ぶ勇氣を与えられる。「煩惱を具足せる凡夫人、仏願力によって摂取を獲」と、仏願力によって摂取を獲るがゆえに勇氣を与えられるのであろう。五濁・五苦・八苦等における逼悩の中にあっても仏願力によって勇氣が与えられ生きることができるということである。

おわりに

分陀利華と名づくこの人は、釈迦、諸仏によって「人中の好人」「希有人」「人中の妙好人」「人中の上上人」「人中の最勝人」とほめられるのである。また「廣大勝解のひと」ともほめられるのである。金剛の真心を獲得した人が獲る現生十種の中の諸仏称讃の益である。

さらには獲信のひとについて、その人を釈尊は「わが親友なり」^⑤とほめるのである。

また『仏説観無量寿経』においても

もし念仏する者は、当に知るべし、この人はこれ人中の分陀利華なり。観世音菩薩・大勢至菩薩、そ

の勝友と為りたまう。

（『真宗聖典』一二二頁）

と、分陀利華と喩えられる「獲信のひと」には、観世音菩薩、大勢至菩薩までもがその勝友となるという。そのことについて善導は『観経疏』で「随い影護したもうこと、また親友・知識のごとくなる」と釈している。五濁・五苦・八苦等に逼悩する凡夫であるとの自覚するこの人を最大限にほめる。そして親友とまでいうこれは私たちの人生にとってどのような意味を持つだろうか。

九州大谷短期大学では近年、本学は「人間福祉」という言葉を掲げる。

予てより人間福祉について研究している社会福祉学者の秋山智久は『人間福祉の哲学』で人間福祉について次のように述べている。

人間福祉の実践の最重要な思想は「人間の尊厳」、それも最低点における人間肯定である。

（秋山智久『人間福祉の哲学』二三頁）

ここで「最低点」という言葉の解釈は、ただ優劣で最低ということを指しているのではなく、無条件でということである。財産、名声、社会的役割など、条件付きのものをすべてを取り払った、はだかのままの人間をそのままに肯定できるかという問題が、人間福祉実践の最重要課題であるとしている。自他共に、そのままの人間を肯定できるかどうかである。他者を肯定できるものは、自己をも肯定できるものである。しかし、私たち人間は、自己の正当化はできても、本当に裸のままの自分自身を自己肯定できるものだろうか。他者についても同様である。

このことを考えると、「称讃」されるということと、「親友がいる」という事柄は人間肯定ということに大きな意味をもたらすのではないだろうか。さらに言えば、もし人との関わりにおいて、社会においてそれが見いだせない状況であったとしても「獲信のひと」には釈迦、諸仏の「称讃」と「親友」としての呼びかけがあるという。私たちが五濁・五苦・八苦等に逼悩される中にあっても人間としての慶びを感じ生きることができるといふ心境が開かれるのではないだろうか。

私たちは、日常、条件状況によつては「人間否定」ばかりする、煩惱具足の存在である。

どのような条件状況においても「人間肯定」が成り立つその具体的内容が私たちに「獲信」ということによつて開かれてくる。「分陀利華と名づく」、その「ひと」の誕生は、自他ともに本当に人間肯定できる「ひと」の誕生であらう。

最後に、本稿では少しだけしか触れ得なかった「人間福祉」という内容については機会を改めてさらに考察し論じたいと思う。

【註】

- ① 『真宗聖典』四六五頁
- ② 『真宗聖教全書』九七五頁
- ③ 「もし仏滅の後のもろもろの衆生等、濁悪不善にして五苦に逼められん。」（『真宗聖典』九五頁）

〔参考文献〕

- 青木 玲 『獲信のひと』（『九州大谷研究紀要第四六号』）
 曾我量深 『曾我量深選集』（第七卷、弥生書房）
 曾我量深 『曾我量深選集』（第八卷、弥生書房）
 廣瀬 杲 『觀經四帖疏講義』（序文義Ⅱ、法藏館）
 廣瀬 杲 『觀經四帖疏講義』（散善義Ⅲ、法藏館）
 古田和弘 『正信偈の教え（上）』（東本願寺出版）
 宮城 顥 『正信念仏偈講義』（第二卷、法藏館）
 安田理深 『正信偈講義』（第一卷、法藏館）
 秋山智久／平塚良子／横山 穰 『人間福祉の哲学』（ミネルヴァ書房）